

氏 名(本 籍)	中 込 四 郎 (茨 城 県)
学 位 の 種 類	博 士 (体 育 科 学)
学 位 記 番 号	博 乙 第 792 号
学位授与年月日	平成 4 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
審 査 研 究 科	体 育 科 学 研 究 科
学 位 論 文 題 目	スポーツ競技者の同一性形成過程とスポーツ場面での危機様態における相互性の 関連
主 査	筑波大学教授 教育学博士 市 村 操 一
副 査	筑波大学教授 教育学博士 松 浦 義 行
副 査	筑波大学教授 医学博士 古 藤 高 良
副 査	筑波大学助教授 福 田 弘
副 査	筑波大学助教授 医学博士 小 川 俊 樹
副 査	筑波大学教授 谷 村 裕

論 文 の 要 旨

〈目 的〉

「競技スポーツにおけるどのような経験が、スポーツ競技者のパーソナリティ形成および変容にどのように関わっているのか」。本論文はこの問題を主な研究テーマとして進められた。

具体的な研究の目的はつぎの二つである。

目的 1：大学スポーツ競技者の自我同一性 (ego identity) 形成の一般的特徴を明らかにする。

目的 2：自我同一性という青年期の発達課題への取り組み方に、スポーツ場面での危機経験がいかに関わっているのかを明らかにする。

特に、研究目的の 2 に対しては、次のような 2 つの仮説が設定された。①生起した危機に対して積極的な対処行動を起こし、そして自己を振り返るような機会を持つ（これを相互性とする）ことによって、危機が人格変容の転機となる。したがって、スポーツ場面で生じた過去の危機様態（危機解決における対処行動）での高い相互性が、同一性形成ならびに自我発達を促進するであろう。②スポーツ場面で生じた危機にどのように対処したかが、その後の青年期後期の同一性形成の過程にも、同じ形をとって現われるのではないかということが仮定された。

〈研究の結果〉

1. スポーツ競技者の同一性形成の特徴

1) Marciaの同一性地位面接から検討した同一性形成の特徴

男子大学スポーツ競技者50名を調査対象として、Marciaの考案した半構造化された面接（同一性地位面接：identity status）が実施された。

その結果、スポーツ競技者は早期完了が多く、同一性達成の少ないことを特徴としていることがわかった。このことは、スポーツ競技者が他の青年期集団と比較し、同一性形成の過程において、積極的模索ないしは危機経験を経ずに同一性達成課題に対処していく傾向の高いことを示唆している。

2) 同一性形成における「スポーツ競技者としての同一性感」の役割

ここでは、スポーツ場面を手がかりとして得られる同一性感を、「スポーツ競技者としての同一性感」と定義し、それが彼らの自我同一性形成や自我発達とどのような関わりを持っているのか検討した。

その結果、スポーツという限定された状況での同一性感が、自我同一性達成尺度得点と高い相関が認められた。しかし、同一性形成と共にあるべき内面的発達（自我発達）においては、スポーツ競技者としての同一性感の程度によって差を認めることができなかった。このことは、スポーツ競技者としての同一性感の高いことが、同一性形成において疑似同一性（pseudo-identity）と言う仮の同一性になる危険性をはらむことを示すと考えられた。

3) スポーツ競技者の同一性形成に影響を及ぼす2つの変数——スポーツ競技者的同一性と自我発達水準——

ここでは、上述のスポーツ競技者としての同一性感に対して新たに操作的定義づけを行い、「スポーツ競技者的同一性尺度」を構成した。そして、スポーツ競技者的同一性と自我発達水準の2つの個人差要因を考慮することによって、スポーツ競技者における同一性形成の特徴がさらに検討された。

その結果、彼らの同一性形成の過程は、スポーツ競技者的同一性の程度が同一性の模索への契機となり、そして自我発達に支えられながら同一性達成へと向かう傾向が見られた。

2. 危機的場面での相互性の程度と自我同一性の達成度の関係ならびに自我機能との関係

1) 自我同一性達成度と諸領域ごとの crisis, exploration, commitment の水準

男子スポーツ競技者164名に対して、危機様態尺度ならびに遠藤による自我同一性尺度を実施した。同一性尺度得点の結果に基づき、対象者の中から2群が抽出された（高同一性群42名、低同一性群41名）。そして、各領域ごとのcrisis（危機）、exploration（探求・努力）、commitment（自己投入）の水準について両群間の比較を行った。

その結果、危機様態での相互性におけるexplorationならびに、commitmentの水準が同一性の感覚を支えていることが明らかとなった。それは、単にそれまでの危機経験の有無ではなく、その危機に対する解決に向けての探求や努力の経験を経て、確固たる信念のもとに自己投入できる対象を発見するまでの過程が、同一性達成と関係することを示唆していると考えられた。

2) 相互性の程度と自我機能との関連

危機様態尺度から求められる3側面の水準得点の合計を相互性の程度とし、対象者を高相互性群

と低相互性群に分けた。両群の自我機能について、ロールシャッハテストに投影された「対象表象の発達水準」と「自我の強さ」から比較を行った。

対象表象では両群間での有意な差をみるほどではなかったが、相互性の高い者の方が高い対象表象の発達水準にあることが認められた。また、自我の強さにおいては、高い相互性を経験してきた者の方が、総じて自我の健全度において優れていることが明らかとなった。

3. スポーツ場面での危機様態のパターンと職業決定様式との対応

ここでは、スポーツ場面での過去の危機様態のパターンと職業決定様式との関連が検討された。特に、スポーツ場面での危機様態が、①積極的模索型（相互的）、②消極的模索型（短縮的）、③危機回避型（防衛的）、④未決・継続型（遷延的）、そして、⑤平穩型の5つのパターンに分類された。

そこで、男子大学スポーツ競技者50名を対象に、各危機様態パターンごとの職業決定の差異が種々の側面から検討された。その結果、過去のスポーツ場面での危機様態のパターンが、職業決定を中心とした青年期の発達課題への対処行動にも概ね繰り返されることが明らかとなった。

4. 事例による検討：同一性危機を呈したスポーツ競技者の過去の危機様態

ここでは同一性危機を呈した以下に示すスポーツ競技者の事例を詳細に検討することによって、スポーツ場面を中心とした過去の危機様態が同一性形成に及ぼす影響についてさらに検討された。

①退部が契機となり同一性の再確立に困難を呈した事例（症例K）

②いわゆる“アパシー”となったスポーツ競技者（症例S）

③発達課題の積残しをしてきている事例（事例H）

④バーンアウトしてしまった女子選手（事例O）

⑤運動部離脱が対人関係の変化への契機となった事例（症例M）

5事例に共通したことは、スポーツ場面を中心とした過去の危機様態での相互性の低さであった。症例KやSの危機様態の対処パターンには回避的な側面が認められ、事例HやOでは競技状況への過剰適応が原因となり、競技状況での主体的な関わりが低く、またスポーツ競技生活の中でのみ形成された同一性を早くから持っていたことを特徴としていた。したがって、過去に生じたそれぞれの危機に対して、解決に向けた対処行動の広がりや深まりがなく、また危機後の自己認知や行動様式に変化が認められるほどではなかった。そしてその後、同一性形成に関わる問題に直面した時に、いずれの事例においても適応的な対処行動がとれないでいた。過去の危機様態と同様にそこでも相互性の低さが繰り返し示すことが認められた。

結 論

スポーツ競技者の自我同一性形成は、生活世界を異にする同世代の者と比較して、模索（危機）経験の少ない同一性形成の過程を特徴としていた。そして、スポーツ競技者の場合、スポーツという限定された状況での同一性感ならびに、スポーツやスポーツ競技者としての役割を中核とした同一性形成が、同一性課題における危機経験の少ない解決を導く原因の一つとなっている。さらに、スポーツ場面で経験される危機に対して、相互性の高い対処行動をとることは、スポーツ競技者の人格発達に関連し、また、スポーツ場面での危機様態の様式が、同一性課題の解決においても繰り返

返される、と結論できる。このことにより、研究目的2で設定された2つの仮説が検証されたと考えられる。

審 査 の 要 旨

スポーツと人格形成の関係を述べる言葉は行動科学によって発見された事実に基づいて発せられたというよりも、スポーツを愛する人々の願望や信念を表してきた、と言ってよいであろう。また、これまでの研究はスポーツ選手と非スポーツ選手の性格テストのプロフィールを比較するという単純な方法で進められてきた。スポーツ経験のどのような側面が人格形成にどのように影響するかについては、その因果関係に迫ろうとして、成功した研究はきわめて少ない。

本論文は人格発達に関して適切な仮説設定を行い、計量的な人格検査法、投影法、面接法、などを駆使し、その検証を通してスポーツ競技者の人格発達の力道的様相を解明したところに特色がある。その結果、スポーツ競技者の同一性形成の状況を明らかにすると同時に、どのようなスポーツ体験が競技者の同一性形成や自我の発達に影響を与えるかについての知見を得たところに、この研究の独創性があると考えられる。本論文は国内はもとより、国際的に見てもスポーツと人格形成の因果関係の様相を系統だって研究した数少ない論文の一つとなったと評価できる。そこで発見された知見は現代の青年期のスポーツ活動を教育学的な観点から考える視座を与えたと言えよう。

しかし、問題が残らなかったわけではない。相互性という厳格な定義のしにくい概念を取り扱ったが、青年期の生活世界における相互性の広がりをも十分に測定できたかどうかについては今後さらに検討し、測定方法にも改善が加えられるべきであろう。

また、スポーツ選手で見られた人格形成の傾向はスポーツ活動の必然的結果として見られる現象であるかどうかについても問題が残る。指導者の指導方針によって人格形成の過程が影響を受けないかどうか、スポーツ以外でもあまりに達成指向の青年期の生き方においてはここで見られた傾向が共通して存在するのか、などについて今後の研究が望まれる。

よって、著者は博士（体育科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。